

ジャック・デリダの「人文科学の言語表現における構造と記号とゲーム」における数学的アナロジーについて（前篇、草稿）

TuvianNavy^{*†}

概要

本稿ではポストモダニズム哲学の第一人者と目されていた哲学者ジャック・デリダの初期の論文（講演）「人文科学の言語表現における構造と記号とゲーム」の発表の経緯を精査し、そこに現れた数学的アナロジーについて浅い分析を試みる。デリダの主張は構造主義の群論による定式化に疑問を投げかけるものと考えられるが、適切な数学的定式化を欠いており、その限りにおいては単なるナンセンスの域を出ていない。ありうべき定式化と、アラン・ソーカルが批判的に取り上げた発表当日の質疑の内容については本稿に続く後篇にて取り扱う予定である。

^{*}twitter: @TuvianNavy, email: tuviannavy@outlook.com

[†]まだ作業中です。二次配布はご遠慮ください。

1 ジャック・デリダの現象学、一般言語学研究

本稿では「脱構築」という文芸批評の方法論を確立したことで知られるフランスの哲学者、ジャック・デリダ¹が1966年に、米国Johns Hopkins大学における会議「批評の言語と人間の科学」²で行なった講演「人文科学の言語表現における構造と記号とゲーム」³講演の発表の経緯と内容を検討する。

米国文化を好むユダヤ人家庭に生まれ、ジャッキーという英語風の名を親に付けられていたデリダは、フランスの高等師範学校École Normale Supérieureを卒業し、米国留学等を経てエドムント・フッサール⁴の哲学説である現象学(phenomenology)を専門とする哲学講師としてSorbonne大学や母校で教えていたが、上述の講演を機に一躍その声望を高めた。

デリダの学問的立脚点はフェルディナンド・ド＝ソシュール⁵以来の一般言語学⁶と、フッサールの現象学の批判的融合であった。⁷

学位論文以来の一連の現象学研究⁸において、デリダは「起源」(genese)すなわち理論の基礎付けの前提の問題を追究した。フッサールは数学の哲学に関心があり、数学のような一貫した理論的な枠組みが正当なものであり、また現実の経験と適合していることを枠組み自体の中で保証する(基礎付ける)ための前提がどこにあるかを問うたのだが、結局、そのような基礎付けは不可能であるとの結論に達したらしい。⁹

フッサールの否定的結論をデリダは敷衍したが、そのために必要となったのがソシュールの一般言語学¹⁰における、言語とその意味内容の関

¹Jacques Derrida, 1930-2004

²[MD70]

³[Der67c][Der70]

⁴Edmund Husserl, 1859-1938

⁵Ferdinand de Saussure, 1857-1913

⁶アダム・スミスから限界革命以前までの経済学を英国での呼称に従って「政治経済学」(political economy)と呼ぶのと同じ理由により、本稿ではソシュールからノーム・チョムスキー以前の言語学をフランスでの呼称に従って「一般言語学」(linguistique generale)と呼ぶことにする。

⁷講演の翌年、1967年に上梓された3冊の著書は、一般言語学を扱ったもの[Der67a]、現象学を扱ったもの[Der67d]、およびその他の論文集[Der67b]であった。全て異なる版元からの出版で、当時のデリダの声望の高さを窺わせる。

⁸[Der54][Der59][HD62][Der67d]

⁹数理論理学におけるこれに類似した議論について本稿では扱わない。

¹⁰[dS16]

係、という観点の導入であった。ソシュールの学説で「記号の恣意性」(arbitraire du signe)という、議論の余地のある考え方があるが、おそらくこのことに関連して、デリダはジェームス・ジョイス¹¹の小説『ユリシーズ』の研究にも時間を割いた。ジョイスの作品に登場する造語は、ソシュールの恣意的な記号という考えの妥当性を試す好例と考えられる。

2 「人文科学の言語表現における構造と記号とゲーム」

1966年にデリダが脚光を浴びることとなった講演（その内容を元にした論文）「人文科学の言語表現における構造と記号とゲーム」^{12 13}は構造主義に対する決定的な批判を提示したと評価される歴史的な講演であるが、本節ではその背景と内容を検討する。

社会科学における構造主義を提唱したクロード・レヴィ＝ストロース¹⁴の構造人類学は、そこに婚姻の「縁組理論」(alliance theory)の群論による数理モデルが含まれていたためもあって、社会科学の数理科学化の趨勢の一環と理解されていた。¹⁵

¹¹James Joyce, 1882-1941

¹²この表題で知られる論文には、2種類の原典[Der67c][Der70]が存在し、講演時の質疑応答は[Der70]にのみ含まれる。後篇で述べるように、アラン・ソーカルによる言及は[Der70]の質疑応答の内容を参照している。輪をかけて混乱を助長するのが、[Der70]の掲載された講演録[MD70]がペーパーバックによる再版(1972年)以後改題（会議名を書名の副題に変更）された[MD72][MD07]事実である。発表の経緯から書誌上はいわば二重投稿や自己剽窃に似た、デリダ本人なら「散種」(dissemination)の好例として歓迎したであろう事態が結果的に生じているのであり、筆者はある種の当惑と苛立ちを禁じ得ない。

¹³この表題における「ゲーム」という語は[Der67c]の旧邦訳[ジ77][ジ83]における邦訳者の選択によるものであり、新邦訳[ジ13]では「遊び」となっていることからわかるように、その訳語選択の妥当性には議論の余地がある（[Der70]の英訳者も脚注でこの点を指摘している）。[Der67c]ではjeu、[Der70]ではplayとなっているこの語を「ゲーム」と訳すのは、だが、後篇にて後述する理由により、筆者の観点からは妥当であると判断でき、また英訳におけるplayも、他のデリダの作品の邦訳でみられる「戯れ」も、筆者の観点からは端的に誤訳である。参考までに、フランス語におけるgame theoryの定訳はthéorie des jeuxであることを付記しておく。

¹⁴Claude Lévi-Strauss, 1908-2009

¹⁵[LS49]、特にその第14章[Wei49]。なおこの趨勢にレヴィ＝ストロース自身が明確に与していた。[LS53]におけるゲーム理論、サイバネティックス、情報理論への言及ならびに[LS56]結語を参照。

人類学分野において国際的な学術交流は元来活発であって、¹⁶彼が米国に滞在していた第二次世界大戦中の短い期間に主要な構想が確立された¹⁷こともあり、構造人類学は早くから英語圏、フランス語圏両方で知られていた。¹⁸

第二次世界大戦後の米国では社会科学の数理化はいわば「既定路線」となっており、社会科学における構造主義への批判的検討はフランスを中心に進められることになる。例えばジャン＝ポール・サルトル¹⁹は1960年の著書『弁証法的理性批判』において構造主義批判を展開した。²⁰レヴィ＝ストロースも1962年の『野生の思考』で実存主義を批判し、²¹両者の論争は注目を集めたものの、サルトルの議論は説得力に欠けるというのが当時の世評ではあったようだ。

米国バルチモアのJohns Hopkins大学において1966年10月に開催された会議「批評の言語と人間の科学」は主に英語圏の文学者、社会学者らがフランスの構造主義を（当時生じていた構造主義批判の趨勢込みで）学ぶ趣旨のものであり、ロラン・バルト²²、ジャン・イポリット²³、ジャック・ラカン²⁴らと共にデリダも招かれていた。²⁵

「人文科学の言語表現における構造と記号とゲーム」と題されたデリダの講演はこの会議の最終日、10月21日にフランス語で行なわれた。以下、その内容を検討する。²⁶

講演の最初で、デリダは「構造」の考え方の出現という「事件」が物事の見方をそれまでとは不連続に変えたと述べる。これは、何か人類が社会的な営みについて自己反省的な見方を始めたことと関係があるし、社会的な構造の外側に立った客観的視点、というものが不可能になった、というようなことであるらしい。

¹⁶ 人類学者に職業的に要求される語学力の高さを考えれば当然かもしれない。

¹⁷ [ZC98][LS44]

¹⁸ [LS58][LS63]

¹⁹ Jean-Paul Sartre, 1905-1980

²⁰ [Sar60]。趣旨を極簡単に言えば「数式に従って人間は意志／行動してない」

²¹ [LS62]

²² Roland Barthes, 1915-1980

²³ Jean Hyppolite, 1907-1968

²⁴ Jacques Lacan, 1901-1981

²⁵ イポリットはÉcole Normale Supérieureの哲学教授で、デリダの師かつ先任教員にあたり、デリダが招かれたのも別の講演者の代役としてイポリットが推薦したことによる。[McC12]

²⁶ 以下、断り書きのない限り、訳文は旧邦訳[ジ83]による。

それに続いて、「中心」という概念をめぐる抽象的議論が現れる：²⁷

ところがまた、中心は、中心によって始められ可能にされるそのゲームを閉じてしまうものでもあるのだ。²⁸中心として、それはさまざまな内容や要素や関係の代替がもはやできなくなるような点なのである。中心においては、諸要素（それらはまた一つの構造の中に含まれたもろもろの構造ともなりうるのだが）の交換や変形は禁じられる。少なくともこれまでは、いつも禁じられた（というこの言葉を故意にわたしはつかっているのだが）²⁹ままだったのである。したがって中心は、本来的に独自のものであるが故に、³⁰任意の構造の中であってその構造を支配しながら構造的に遁れてしまうところのものそれ自体を構成する、というふうについて考えられてきたのである。ある古典的な構造の思想³¹においては、中心というものが構造の中と構造の外にあるというように逆説的にいわれることのあるのはそのためなのである。それは全体の中心にあるのだが、にもかかわらず中心は全体に属してはいないので、全体はよそにその中心をもっていることになる。中心が中心でないことになる。³²中心のある構造という概念は—たとえそれが統一³³そのものをあらわし³⁴、哲学または科学としてのエピステメーの条件をあらわしているとしても—、矛盾した形で統一しているのである。³⁵そして、矛盾における統一というものは、いつもそうであるように、ある欲求の力をあらわしている。事実、中心のある構造という概念は、基礎としての一種の不動性と、それ自身ゲームから遁れているがために安定した一種の確信³⁶とによって構成された、基礎付けられたゲームという概念なのである。

²⁷[ジ83], p.212. 強調は訳書に従った。なお講演当日のイポリットによる質疑もこの「中心」という概念の確認から始まっている。これについては後篇で扱う。

²⁸Pourtant le centre ferme aussi le jeu qu'il ouvre et rend possible.

²⁹ここはよく意味がわからないが、interditeには「禁止」「当惑」「絶句」等の意味がある、と英訳に注釈がある

³⁰que par définition est unique

³¹une pensée classique de la structure

³²Il est au centre de la totalité et pourtant, puisque le centre ne lui appartient pas, la totalité a son centre ailleurs. Le centre n'est pas le centre.

³³coherence

³⁴represente

³⁵est contradictoirement cohérent

³⁶une certitude rassurante

原文を見るとこの一節は数学のジャーゴンを多用していることがわかるので、そこを意識して訳し変えてみよう：³⁷

ところがまた、中心は、中心によって開かれ可能となるそのゲームを閉じてしまうものでもあるのだ。中心として、それはさまざまな内容や要素や項の代替がもはやできなくなるような点なのである。中心においては、諸要素（それらはまた一つの構造の中に含まれたもろもろの構造ともなりうるのだが）の置換や変換は禁じられる。少なくともこれまでは、いつもいうことを禁じられた（というこの言葉を故意にわたしはつかっているのだが）ままだったのである。したがって中心は、定義によって一意なものであるが故に、任意の構造の中であってその構造を支配しながら構造型から遁れてしまうところのものそれ自体を構成する、というふうにいつも考えられてきたのである。構造についてのある古典的な考え方においては、中心というものが構造の中と構造の外にあるというように逆説的にいわれることのあるのはそのためなのである。それは全体の中心なのだが、にもかかわらず中心は全体に要素として帰属してはいないので、全体はよそにその中心をもっていることになる。中心が中心でないことになる。中心のある構造という概念は—たとえそれが統一＝接続性そのものを表現し、哲学または科学としての認識の成り立つ条件をあらわしているとしても—、矛盾における統一なのである。そして、矛盾における統一というものは、いつもそうであるように、ある欲求の力をあらわしている。事実、中心のある構造という概念は、基礎としての一種の不動性と、それ自身ゲームから遁れているがために安定した一種の確信とによって構成された、基礎付けられたゲームという概念なのである。

筆者にはこれは（冒頭のゲームと末尾の統一＝接続性についての記述を除けば）群論における数学的事実³⁸についての、詭弁的表現を交えた記述に見える。

³⁷原文は[Der67c][Der70]双方を参考にし、訳語を変更した部分を強調してある。元の訳文の強調箇所は、訳文を変更していない場合には外した。

³⁸群論による数理モデルはレヴィ＝ストロースの構造主義の不可欠な一部であることに注意。

ここでいう「中心」が群論の概念としての「中心」であるという解釈に基づいて、前頁のありうべき数学的内容を³⁹箇条書きにしてみる：

中心は中心によって開かれるゲームを閉じる 無意味

中心においては諸要素の置換は禁じられる 一般には誤り、ただし位数3以上の対称群の中心は自明（単位元である零元のみを要素にもつ）

中心においては諸要素の変換は禁じられる 一般には誤り、ただし位数4以上の交代群の中心は自明（単位元である零元のみを要素にもつ）

中心はいうことを禁じられていた 無意味

中心は定義によって一意 群の中心は一意なので、それを定義に含めるなら正しい

中心が構造の中と構造の外にある 無意味

中心は（もとの構造）全体の中心 $Z(G) \subset G$ なので、正しい

中心は（もとの構造）全体に属していない $Z(G) \not\subset G$ なので、正しい

中心が中心でない 誤り

中心のある構造という概念は矛盾における統一である 無意味

ヘーゲル流の特徴的な詭弁語法に慣れた人であれば、ここで誤り、無意味とした主張について留保を付けたくなるかもしれないが、これはあくまで数学的命題として誤り、もしくは真偽を問えないということであって、デリダが独特な方法で表現しようとしている内容について誤り、無意味としているわけではないことに注意されたい。

幾何学的に言えば、ここでの「全体」と「中心」の関係は円周と直径、空間とその中の座標軸に相当するのであって、「中心」は球体の内側のような「中央部」ではない。おそらくこれが「中心が中心でない」という明白な誤りにデリダが負わせようとしている意味であろう。他の、ここで無意味とした主張を意味が通るように解釈するにはもう少し準備が必要であり、今はデリダの論旨を引き続き追うことにする。

³⁹ デリダの立論の妥当性は一定の程度において救うかも知れないが、デリダの修辞の不適切性を強調するような解釈を、デリダ自身が妥当なものとして承認することはありえないだろう。

デリダはこの「構造」と「中心」の概念を持ち出して、哲学史における時代毎の支配的なテーマの構図と変遷、というようなことをいいたいようだ：⁴⁰

まさにそうであるならば、いま問題にしているところの断絶以前における、構造概念の歴史はすべて、中心から中心へと行なわれる一連の代替⁴¹、連鎖的に行なわれる中心の決定作用⁴²として考えられねばならない。中心は次々と⁴³規則的に⁴⁴さまざまな形をとり、いろいろな名前がつけられる。西欧の歴史と同じように、形而上学の歴史は、そうしたもろもろの隠喩と換喩の歴史となるであろう。その行列の型⁴⁵は—このようにほとんど何の証明もせずに⁴⁶省略した⁴⁷言い方をするのを許されたい、というのは、そうすることによって早くわたしの主題に近づきたいためなのだ—存在を語のあらゆる意味における現前として決定付ける操作をあらわすことになる。基底⁴⁸や原理、あるいは中心につけられる名前はすべて、いつも一つのある現前（エイドス〈形、本質、eidos〉、アルケー、テロス、エネルゲイア〈エネルギー、energeia〉、ウーシア〈本質、存在、実体、主体、ousia〉、アレテイア〈真実、aletheia〉、超越性⁴⁹、意識、神、人間等々）の不変式⁵⁰を示してきたのである。

⁴⁰[ジ83], pp.213-214。強調は訳書に従った。

⁴¹serie de substitutions

⁴²un enchainement de determinations du centre

⁴³successivement

⁴⁴de maniere reglee

⁴⁵la forme matricielle

⁴⁶etre aussi peut demonstratif

⁴⁷elliptique

⁴⁸fondement

⁴⁹transcendentalite

⁵⁰l'invariant d'une presense

この一節も数学的ジャーゴンを意識して訳しなおしてみる：⁵¹

まさにそうであるならば、いま問題にしているところの断絶以前における、構造概念の歴史はすべて、中心から中心へと行なわれる代替の列、連鎖的に行なわれる中心の決定作用として考えられねばならない。中心は逐次的に正則にさまざまな形をとり、いろいろな名前がつけられる。西欧の歴史と同じように、形而上学の歴史は、そうしたもろもろの隠喩と換喩の歴史となるであろう。その行列の型は—このようにほとんど何の証明もせずに省略＝楕円した言い方をするのを許されたい、—というのは、そうすることによって早くわたしの主題に近づきたいためなのだ—存在を語のあらゆる意味における現前として決定付ける操作をあらわすことになる。基底や原理、あるいは中心につけられる名前はすべて、いつも一つのある現前（エイダス＜形、本質、eidos＞、アルケー、テロス、エネルゲイア＜エネルギー、energeia＞、ウーシア＜本質、存在、実体、主体、ousia＞、アレテイア＜真実、aletheia＞、超越性、意識、神、人間等々）の不変式を示してきたのである。

上記の「省略＝楕円した」と訳出したのはelliptiqueという語の地口である。数学者として訓練を受けた者なら誰であれ「双曲」「放物」「楕円」という円錐曲線を形容する単語から具体的な数学的性質を連想する。これは時間の経過に伴って数学的に定式化された系がどう変化するか、ということを一言で伝えるための表現であって、「楕円」はケプラー系のような、一定の時間で元の状態に戻るような系を暗示する。このことから、デリダが「構造」というものを保存的な力学系として捉えていることがわかるし、「連鎖的に行なわれる中心の決定作用」の舞台としての「全体」（普遍）とは区別していると判断しても良いだろう。

ちなみに、論文で「行列」(matricielle)という語、もしくは「行列の型」(La forme matricielle)という語の並びはこの一節の他にはもう一カ所のみ、「経験主義はあらゆる誤りの母胎の形式である」という表現における「母胎の形式」として現れるのみであり、当然期待されるように、この語が出てくる理由を明示的に説明している部分はない。

⁵¹原文は[Der67c][Der70]双方を参考にし、訳語を変更した部分を強調してある。元の訳文の強調箇所は、訳文を変更していない場合には外した。

これ以降のデリダの立論の細部に立ち入って検討することは筆者の能力を越えるし、本稿の目的でもない。筆者はその代わり、長い抽象的な前置きが終わり、レヴィ＝ストロースの業績についての検討を始める直前にデリダが放つ唐突な一言に読者の注意を喚起して、講演本文についての検討を一旦打ち切ることとする。曰く：⁵²

ある遺産からその遺産そのものの解体に必要な諸手段を借用するような、そうした言語表現の位置付けの問題をはっきりと組織的に提起することが問題なのだ。つまり、経済と戦略の問題である。

上に挙げた二つの文の関係は筆者には理解できない。前半はデリダが広めた脱構築 (deconstruction) と呼ばれる批評技術のシンプルな説明だが、後半との関係を想像させるものは何もない。ただ、ミクロ経済学において戦略を考える道具としてゲーム理論というものが広く使われているから、この論文に頻出するフランス語の jeu という単語は、この意味での「ゲーム」ではないかと考えたくなる。だが、例によって、論文の他の場所に経済 (economie) という単語は2回しか出てこないし、戦略 (strategie) という単語は他には一度たりとも出てこないのである。

デリダの書いていることは世評通りの単なる銜学的なナンセンスであると判断すべきなのだろう。「行列」も「経済」も「戦略」も何も説明がないし、「省略＝楕円」という地口は、物理学者がやるような手振り (hand-weaving) を気取って不可欠な説明を省くものだろう。デリダはそこに書いてあるように見えることがなんであれ、その内容に責任をとる気はないのだ。⁵³ したがって、以下は筆者の妄想にすぎない：

⁵²[ジ83], p.219。強調は訳書に従った。

⁵³インターネット時代である21世紀初頭には、検索で上位に食い込み、広告料収入を増やすためのSEO (search engine optimization) というコンテンツ作成上の一連の技巧があり、意味ありげなキーワードを機械的に列挙するワードサラダという手法は、初期によく用いられたものだが、デリダの文体に特徴的な、真意を明確にしようとしないうる雑駁さはワードサラダに通ずるものがある。デリダの文言に時間を割いて検討を加える筆者はさしずめワードサラダを高くランク付ける検索エンジンの役回りであろう。デリダの散種 (dissemination) という概念とも考え合わせると、ポスト構造主義哲学と商業主義的なSEOやスパムや炎上マーケティングには思想的な類縁性があるように思えてならない。大量のジャンク情報で通信チャネルの容量を浪費する行為は、情報化社会においてリソース配分を増やすという目的に合致した合理的行動なのだろう。

筆者が誤認、誤解している限りにおいて、デリダは個別に立証することも難しい哲学史上の時代毎の論点の遷移を、ゲーム理論、経済学、線形代数、群論、力学系の議論とのアナロジーで理解し整理できると示唆していて、その見通しは魅力的だ。実際、これはレヴィ＝ストロースの構造主義（閉じた未開社会における社会構造や神話の象徴体系を群構造として把握するという方法論）の先に進んだ技術的に高度な話題というものがもしあるなら、そこに出てきそうな議論なのだ。だがその説明はデリダ自身認めるように「省略」されているし、列挙された具体例もその妥当性を判断するには説明が足りていない。しかも、手品の種である、離散的な記号力学系を作用素で表す、という考えがどこから来たのか、デリダは狡猾に口を閉ざすのである。⁵⁴総じて、デリダは読者（聴衆）に魅力的な見通しをちらつかせながら自らに歩み寄ることを一方的に求めている。⁵⁵これはフェアなやりかたとはいえない。

⁵⁴『エクリチュールと差異』[Der67b]に収録された11篇の論文の中で、10章のこの論文だけは脚注が一切付けられていない。なお少なくとも後半の8章から11章までの表題には仕掛けがあって（前半にも何か示唆があるのかもしれないが、筆者には判断できなかった）、アントナン・アルトーを扱った8章は「上演の封鎖」(la cloture de la representation)つまり「表現の閉包」、ジョルジュ・バタイユを扱った9章は「経済学の特種ケースから一般ケースへ」(de l'economie restreinte a l'economie generale)、10章（この論文）は「構造と記号とゲーム」、エドモン・ジャベスを扱った11章は「省略」(ellipse)つまり「楕円」と、力学系に関連する概念を示唆するキーワードが並ぶ。8章の「表現」(representation)を数学の「表現論」における「表現」つまり系の対称性を表す群構造の行列表示のことだとすると、その「閉包」(cloture)は作用素環ということにならないだろうか。9章についてはやや苦しいが、経済学の、富の総量を保存する「一般均衡」(general equilibrium)とそれが成り立たないため「他の条件が同じなら」という但し書きが必要な「部分均衡」(partial equilibrium)の対比を連想させる。これらの表題を列挙した（ただし念の入ったことに11章の「省略」のみ書き下ろしのため、原文では文字通り「省略」されている）、巻末の初出一覧に付けた短い後書きの中で、デリダはぬけぬけと書く：「そのシステムについては点線であらわしただけである。そこには空白が置かれ、あるいは放置されている。空白なしにはいかなるテキストもこのようなものとしてあらわれはしないだろう」([ジ83], p.281、強調は引用者による)このような思わせぶりにつきあう義理はないが、筆者の妄想ではこれは「諸論文を貫くアイディアについてはヒントをちりばめたが、あえてそのアイディアの（人文学の領域の外にある）出所については意図的に、不作為を決め込んで触れなかったので10章には（講演後それをする時間はあったにもかかわらず）脚注は付けていない。このアイディアを伏せていなかったら、一連の論文は現にそうあるようなものにはなっていない（し、自分も名声を博することはなかった）」と読むことしかできない。

⁵⁵但し、後篇で詳述するが、講演当日の質疑では、聴衆がゲーム理論を念頭に置いていることが明らかであり、当日その場でのデリダはもう少し率直に自らのモチベーションを語っていた可能性はある。デリダ本人なら現前とエクリチュールの乖離の実例だと囁くことは確実である。

これをレヴィ＝ストロースによる構造人類学の提示と比較してみよう。少なくとも『構造人類学』迄の時点での彼は、行なうべき立証を怠っていない。群論による数理モデルの構築を最良の専門家を選んで依頼しているし、⁵⁶数理科学化の先達たちの名を人類学の発展におけるロールモデルとして掲げることがを何ら躊躇することがない。⁵⁷この率直さ、誠実さに比較しうるものをデリダは一切持っていないのである。

デリダのレヴィ＝ストロース批判の筋立てを（本稿の後半での説明を先取りして）筆者なりに要約するならば、明示的な構造をハミルトニアンとか零和ゲームとか何かそういう保存的な系で表せるとして、現実が不変でないからいつかその構造は壊れる、というようなものだろうが、レヴィ＝ストロースは対称性を持った社会構造を保てる、その意味で閉じている、未開社会が壊れて消えていくこと、親族構造の分析の基礎になるフィールドワークが時間との勝負であることを明確に認識していた。⁵⁸つまり、デリダによるレヴィ＝ストロース「批判」は、それがよしんば正直に行なわれたものだったとしても、ためにする批判の色彩が濃い。

しかし、この講演でデリダが設定した議論の枠組みが、1970年代以降、インターネットの普及期まで、批評業界、現代思想業界という巨大産業を支えたのである。時代はデリダに味方した、と言わざるを得ない。理由はいくつかある。

⁵⁶[Wei49]

⁵⁷[LS53][LS56]

⁵⁸「民族学における構造の概念」[LS53]結語での、天体観測と民族誌の対比を参照。

まず、1966年時点の英語圏において、言語とメタ言語の区別は、おそらく判明な概念ではなかった。アルフレッド・タルスキ⁵⁹は1930年代に、当初はポーランド語で書かれた真理理論の仕事の中で「メタ言語」(metajęzyk)という造語を用いたが、この語が英語に入るのは1956年、タルスキの論文集でこの論文の英訳が出版され、同じ年に（構造主義人類学を構想した当時のレヴィ＝ストロースの盟友でもあった）ローマン・ヤコブソン⁶⁰の講演「言語学の問題としてのメタ言語」の中でタルスキの造語が紹介された時点である。⁶¹論理学者を除く世界の殆どの人間はそれまで言語とメタ言語の区別という概念を的確に表現する術を知らなかったし、デリダの哲学的著作の殆どはこの区別を扱っていないながら、区別を曖昧にする文体に本質的に依存している。⁶²

次に、上記の検討では触れなかったが、レヴィ＝ストロースのライフワークとなる『神話論理』と題された一連の研究の非実証性に対する批判には一定の妥当性があったこと。デリダも講演の中で『神話論理』の1冊目である『生のもものと火を通したもの』⁶³に触れているが、簡単に言えば、レヴィ＝ストロースは1966年にはもはや1940年代から1950年代前半にかけてそうであったような革新者ではなかった。デリダの（いわゆる「形而上学批判」的な）レヴィ＝ストロース批判は直接的にはこの点に対するものと見ることができ、これを（やや左傾した）米国の人文学の世界は歓迎したのである。

⁵⁹ Alfred Tarski, 1901-1983

⁶⁰ Roman Jakobson, 1896-1982

⁶¹ [Tar33][Tar56][Jak56]。もちろん、専門の論理学者の間に限れば、それ以前に英語やドイツ語で同等の単語が使われていなかった保証はない。

⁶² フランス語では英語と違って接続法や条件法（英語の仮定法に相当する）を示す動詞の語尾変化が壊れておらず、これらを適切に使用すれば英語よりは明確に言語とメタ言語の区別を文脈的に示している可能性はある。だが、それは明示的に言語とメタ言語の区別を行なうこととは別の話である。

⁶³ [LS64]。当時まだ英訳[LS69]はなかった

最後に、単純にあらゆる幸運がデリダを支えたこと。その後の文芸批評や社会評論の世界でのデリダの重要性にあたかも相関しているかのように、デリダの前に道が開かれていった観がある。講演の行なわれたJohns Hopkins大学の学内誌の記事によると、人類学者リュック・ド＝ウーシュ⁶⁴の講演予定がキャンセルになり、イポリットが弟子のデリダを代役に推したのだという。⁶⁵仮にウーシュが会場にいたら、デリダのレヴィ＝ストロース批判に対して何らかの反批判を試みたのではないだろうか。また、ヤコブソンも1966年の会議のコロキストの一人に挙げられており、⁶⁶デリダの講演を聴いていてもおかしくないのだが、後篇でとりあげる、当日の質疑応答の記録を読む限り、彼の発言はない。デリダが一介のうだつのあがらないフッサール読みで終わらなかったことにはなにか説明のつかない運のようなものが関与している。

さて、ではデリダが想定していると思われる、ある時代において支配的だった論争の構図⁶⁷が時代の変化で無意味になる、といった話を、記号力学系による数理モデルとして考えて、それを作用素の話に結びつけることは本当に成立しているのだろうか。次節においてこの問題を検討したい。(続く)

⁶⁴Luc de Heusch, 1927-2012

⁶⁵[McC12]

⁶⁶[MD72], p.333.

⁶⁷後期ウィトゲンシュタインの哲学における「言語ゲーム」に相当する

参考文献

- [Der54] Jacques Derrida. *Le problème de la genèse dans la philosophie de Husserl*. PhD thesis, 1954. 『フッサール哲学における発生の問題』、みすず書房、2007年.
- [Der59] Jacques Derrida. "genese et structure" et la phenomenologie. *Ecriture et la Différence*, pages 229–252, 1959. 「「発生と構造」と現象学」『エクリチュールと差異』5章所収.
- [Der67a] Jacques Derrida. *De la Grammatologie*. Minuit, 1967. 『根源の彼方に：グラマトロジーについて』上下、現代思潮社、1972年.
- [Der67b] Jacques Derrida. *Ecriture et la Différence*. Seuil, 1967. 『エクリチュールと差異』上下、法政大学出版局、1977年/1983年、『エクリチュールと差異』法政大学出版局、2013年.
- [Der67c] Jacques Derrida. La structure, le signe et le jeu dans le discours des sciences humaines. *Ecriture et la Différence*, pages 409–428, 1967. 「人文科学の言語表現における構造と記号とゲーム」『エクリチュールと差異（下）』（旧訳）法政大学出版局、1983年、10章所収、「人間科学の言説における構造、記号、遊び」『エクリチュールと差異』（新訳）法政大学出版局、2013年、10章所収.
- [Der67d] Jacques Derrida. *La Voix et le Phénomène*. PUF, 1967. 『声と現象：フッサール現象学における記号の問題への序論』理想社、1970年、『声と現象』筑摩書房、2005年.
- [Der70] Jacques Derrida. Structure, sign and play in the discourse of the human sciences. *The Language of Criticism and the Science of Man: The Structuralist Controversy*, pages 247–272, 1970. 2014年現在、筆者の知る限りで出版物としてまとまった邦訳は存在しない.
- [dS16] Ferdinand de Saussure. *Cours de linguistique générale*. Payot, 1916. 『一般言語学講義』岩波書店、1972年.
- [HD62] Edmund Husserl and Jacques Derrida. *L'origine de la géométrie*. PUF, 1962. 『幾何学の起源』青土社、1976年.

- [Jak56] Roman Jakobson. Meta language as linguistic problem. First presented as the Presidential Address at the Annual Meeting of the Linguistic Society of America, December 27, 1956, Selected Writings, VII. Edited by S. Rudy. Mouton, 1985 (pp. 113-121), December 1956. 『言語とメタ言語』勁草書房、1984年所収.
- [LS44] Claude Levi-Strauss. Reciprocity and hierarchy. *American Anthropologist*, 46(2):266–268, 1944.
- [LS49] Claude Levi-Strauss. *Les Structures élémentaires de la Parenté*. PUF, 1949. 『親族の基本構造』青弓社、2001年.
- [LS53] Claude Levi-Strauss. Social structure. *Anthropology Today*, pages 524–553, 1953. 「民族学における構造の観念」『構造人類学』15章所収.
- [LS56] Claude Levi-Strauss. Les organizations dualistes existent-elles? *Bi-jdragen tot de Taal-, Land- en Volkenkunde*, 112(2):99–128, 1956. 「双分組織は実在するか」『構造人類学』8章所収.
- [LS58] Claude Levi-Strauss. *Anthropologie structurale*. Plon, 1958. 『構造人類学』みすず書房、1972年.
- [LS62] Claude Levi-Strauss. *La Pensée sauvage*. Plon, 1962. 『野生の思考』みすず書房、1976年.
- [LS63] Claude Levi-Strauss. *Structural Anthropology*. Basic Books, 1963.
- [LS64] Claude Levi-Strauss. *Le Cru et le cuit*, volume I of *Mythologiques*. Plon, 1964.
- [LS69] Claude Levi-Strauss. *The Raw and the Cooked*, volume I of *Mythologiques*. 1969.
- [McC12] Bret McCabe. Structuralism’s Samson. Johns Hopkins Magazine (electronically), Fall 2012.
- [MD70] Richard Macksey and Eugenio Donato, editors. *The Language of Criticism and the Science of Man: The Structuralist Controversy*. The Johns Hopkins University Press, 1970. 「批評の言語と人間の科学」講演録、邦訳なし？.

- [MD72] Richard Macksey and Eugenio Donato, editors. *The Structuralist Controversy: the Language of Criticism and the Science of Man*. The Johns Hopkins University Press, paperback edition, 1972. 『構造主義論争』（「批評の言語と人間の科学」講演録の改題）改題前の付録3篇（仏文）は削除された。
- [MD07] Richard Macksey and Eugenio Donato, editors. *The Structuralist Controversy: the Language of Criticism and the Science of Man*. The Johns Hopkins University Press, 40th anniversary edition edition, 2007. 「批評の言語と人間の科学」40周年記念版。
- [Sar60] Jean-Paul Sartre. *Critique de la raison dialectique*, volume 1. Gallimard, 1960. 『弁証法的理性批判1』サルトル全集26、人文書院、1962年。
- [Tar33] Alfred Tarski. *pojecie prawdy w jezykach nauk dedukcyjnych*. 1933.
- [Tar56] Alfred Tarski. The concept of truth in formalized languages. *Logic, Semantics, Metamathematics*, 1956.
- [Wei49] Andre Weil. Sur l'etude algebrique de certains types de lois de mariage. *Les Structures élémentaires de la Parenté*, 1949. 「いくつかの型の婚姻法則（ムルンギン型体系）をめぐる代数的研究について」『親族の基本構造』青弓社、2001年、14章所収。
- [ZC98] Aristide R. Zolberg and Agnes Callamard. The École libre at the new school, 1941-1946. *Social Research*, 65(4):921-951, 1998.
- [ジ77] ジャック・デリダ. エクリチュールと差異・上. 法政大学出版局, 1977.
- [ジ83] ジャック・デリダ. エクリチュールと差異・下. 法政大学出版局, 1983.
- [ジ13] ジャック・デリダ. エクリチュールと差異（新訳）. 法政大学出版局, 2013.

⁶⁸各文献の邦訳についての付記は読者の参考の為に付したもので必ずしも筆者は内容を確認していない。本文中で特に邦訳を参照、引用したものについては都度立項した。